

Title	Alastorの意味
Author(s)	蜂谷, 昭雄
Citation	英文学評論 (1968), 22: 26-45
Issue Date	1968-01
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_22_26">https://doi.org/10.14989/RevEL_22_26</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# *Alastor* の 意 味

蜂 谷 昭 雄

## 1

*Alastor* がシェリィの *Hamlet* と称されて、彼の作品中最も多くの論文をその周囲に集めたのは、その深遠さのためではなく、むしろ曖昧さのためであった。従って *Hamlet* と違って、報いられること少ないかも知れないが、やはり *Hamlet* 同様、曖昧さが一つの魅力を加えているとも言える。実際、少し注意深く読めば分かるように、シェリィは難解な詩人であり、*Alastor* は中でも難解なものに属する。そして読む人の視点によって、異なった姿を呈し、異なった色調を帯びるのは、作品の立体性をもの語るとともに、シェリィ自身の視点が単一でないことにも起因するのである。いわゆるワーズワース的な面も、重視されて来た一面ではあるが、それでもってこの詩全体を律することはできない。数多くのワーズワース的遺響にもかかわらず、この詩はシェリィとワーズワースとの決定的な相違を際立たせるものであって、主人公なる詩人のモデルをワーズワースに求めることの不当なのは勿論、むしろワーズワースの影響下から独立して行く新しい詩人の誕生をこそ、この詩は告げるものである。そこでまず、ワーズワース的遺響の具体例に触れておこう。普通に指摘されている ‘obstinate questionings’ (26), ‘natural piety’ (31), “too deep for tears” (713) 以外にも、それらは認め得るのであって、例えば ‘incommunicable dream’(39) は ‘incommunicable sleep’ (*Affliction of Margaret*, 56) に、また ‘hope and despair, / The torturers’ (639f.) は ‘torturing hope’ (*The Excursion*, i, 913) に多分由来するものであろうし、‘the deep heart of man’ (49) なる句も漠然とワーズ

ワース的である。しかしこれらの例が殆どすべて、720行からなるこの詩の最初と最後の部分に集中することは注目されてよい。つまりワーツワース的視点が全篇の枠組みとして採り入れられながら、全体の内容がそのような枠組みに収まり切らないでいることも、この作品の問題性の一つである。事実‘natural piety’一つにしても、この詩を *Queen Mab* の延長上において、必然論の立場から眺めると、この句の出典をベイコンの随筆‘Of Superstition’からの一節に求めることも可能である。<sup>1)</sup>(シェリィは *Queen Mab* への長文の注において、すでにこの句をベイコンのものとして引用している。) また‘hope and despair/The torturers’ 或いは ‘a gloomy smile/Of desperate hope’ (290f.)なる句も、*Alastor* へのシェリィ自身の序文における ‘untimely grave’ 対 ‘slow decay’ という二律背反的必然論と同質に見なすこともできる。この作品における詩人自身の視点の多元性は単なる曖昧さではなく、懐疑主義的立場に基づくものであろう。例えば、同じ1815年頃に書かれたと考えられる断片的論文 *On a Future State* では、シェリィは経験論的伝統に従う *ratiocinative* な思索家の態度でもって、来世の可能性を否定する。しかしその故をもって *Grabo*<sup>2)</sup> のように、この論文の年代を繰り上げようとしても問題は片附かない。1818年に至っても、なお否定的な ‘Sonnet : Lift not the Painted Veil’ の如きが書かれている一方、来世に対する積極的な希望と信仰を打ち出したかも知れない例はすでに ‘On Death’<sup>3)</sup> にも見られる。しかしその中間の時期にあって、懐疑主義者としての面目をはっきり表わしているのが、*Queen Mab* (1812) から *Alastor* (1815) に至る主要作品の系列である。むしろ来世への vision は部分的には *Queen Mab* に一そう著しい。

## 2

*Alastor* の問題点にはいる前に、シェリィの当時——あるいは全生涯——の関心がいずこに向けられていたかの例として、*Alastor and Other Poems*

に収められた一篇 ‘To——’ を採り上げて考察したい。<sup>4)</sup>それが *Alastor* に対して有する意義は、そのうちに明らかになるであろう。わずか36行の小篇ながら、*Alastor* との語句の類似、照応は二、三に止まらない。<sup>5)</sup>一体この詩はコッルリッジに寄せたものとメアリィ夫人が考えてから、一般にそう解されているけれども、それは *Alastor* の主人公をワーズワースと見るのと同じ誤まりで、むしろシェリィ自身に対する語り掛けと見るべきものである。メアリィには、そのように考えるべき何かもっと客観的な証拠があったかも知れないが、一つにはこの詩のエピグラフに採られたギリシャ文がその理由であろう。というのは、*ΔΑΚΡΥΣΙ ΔΙΟΙΣΩ ΠΟΤΜΟΝ ἈΠΟΤΜΟΝ*. (涙をもって私は非運に耐えよう) という、この言葉はエウリピデスの *Hippolytus*, 1144の引用であって、元来はコロスが主人公ヒッポリュトスに寄せる同情の言葉だからである。しかしシェリィには、文脈を離れて自由に借用するくせがあるし、今の場合もそれだけを見れば、わが身の不運を歎くと見るのがむしろ自然な言葉づかいである。ともかく以下の言葉は詩人自身に対して向けられたものと考えよう。

With mountain winds, and babbling springs,  
And moonlight seas, ...  
Thou didst hold commune, ... (7, 8, 10)

And thou hast sought in starry eyes  
Beams that were never meant for thine, (13f.)

Ah! wherefore didst thou build thine hope  
On the false eart's inconstancy? (19f.)

ここに言われる ‘false earth’ とは自然と人間とを等しく含める言葉である。しかし、‘Nought may endure but Mutability’ (‘Mutability’ 16) と歎

じた詩人は、人間界の裏切りをも、物質的自然界の法則と同じ必然の働らきと見るが故に、他に対して恨むことはしない。詩人が自然や人間との交わりを求めたのも、それ自体のためではなくて、それらが啓示し、積み明かしてくれると彼が期待したところの、超自然界への認識の媒介としてである。そう考えると、この詩の第一聯の心象が先に引いた部分の ‘winds’ や ‘starry eyes’ に対して持つ意味がはっきりする。

Oh ! there are spirits of the air,  
 And genii of the evening breeze,  
 And gentle ghosts, with eyes as fair  
 As star-beams among the twilight trees: (1-4)

しかし詩人はもはや自らの心以外に向かうべき所を持たない。

Did thine own mind afford no scope  
 Of love, or moving thought to thee ? ...  
 Thine own soul still is true to thee,  
 But changed to a fiend through misery ... (21-2, 29-30)

*Alastor* の問題が始まるのはここから先である。シェリィにあっては自然は常に、超自然の前景として、あるいは自我の意識の象徴としてのみ存在を保つ。彼にとってはモン・ブランも西風も詩人の精神と感応する限りにおいてのみ存在し、むしろ詩人の精神の象徴として内界に吸収されてしまう。それはボードレールの「象徴の森」 (*la forêt de symboles*) でもあり、パークリィの主観的観念論のシェリィ流の独在論 (solipsism), 無世界論 (acosmism) への帰結でもある。シェリィにおいてしばしば非難される自己憐憫も, narcissism もこの文脈において眺めなければ理解されない。人間精神のかかる壮大な劇化が *Prometheus Unbound* であり, Rieger<sup>7)</sup> の表現を借りれば,

...the “action” of *Prometheus Unbound* elaborates aspects of a single act of forgiveness, performed just before the rise of the curtain; the simultaneous “time” of the first three acts shifts to eternity in the last; “place” extends throughout the mental landscape of Prometheus, who is strictly speaking the only character.

そこで、当面問題としている詩に現われた ‘fiend’ については改めて *Alastor* との関連で論じなければならないが、差当っては別の方向に注意を向けよう。それはメアリィ・シュリィの *Frankenstein* である。この「ゴシック的」恐怖小説が同類の多くの作品の中で、ひとり現代にまで生き残った理由の一つは、二流の才能であった著者の意図を超えて、それが含む心理的眞実の故であり、バイロン、シュリィらの多くの詩と同じく、それが相剋する自己意識を扱っている点にある。この小説が着想されたのは、メアリィが後に記すところによると（リーガァに従えばメアリィの証言は常に疑わしいのであるが）、1816年の夏スイスの山荘でバイロン、シュリィ、メアリィの三人が語り合った際に、夫々が超自然的物語を書き上げることが提案されたことによるのであって、結局メアリィのみがそれを果すことになった。1816年といえば *Alastor etc.* 刊行の年である。そしてその詩集からも、またシュリィとの平常の生活からも、19歳のメアリィが多いに刺激を得たであろうことは、メアリィの弁明にも拘らず、想像に難くない。そしてこの分裂した心理的葛藤への、メアリィのあるいは無意識な洞察が、一般の人心の中でフランケンスタインの名を彼が創造した怪物と混同させる一因となった、というのは Rodway<sup>8)</sup> の指摘するところである。一方奇妙なことに、*Alastor* とは復讐神を意味するというピーコックの主張にも拘らず、それを同名の詩の主人公の名前であると思い込んだ人は多いのであって、その中にはシュリィ<sup>9)</sup> に対するやや軽率な誤解を時に非難される F. R. Leavis だけではなく、

すぐれた理解を示す D. G. James<sup>10)</sup> や、特に上述の指摘をなしたロドウェイ  
 までが含まれることは、これまた彼の説の心理的真實性を裏付けるようで面  
 白い。ところで、この ‘changed to a fiend through misery’ に対して  
*Frankenstein* を引合いに出したのは、その第十章に、主人公ヴィクターの  
 分身<sup>11)</sup> というべき怪物の、次のような言葉が現われるからである。

‘I was benevolent and good ; misery made me a fiend ... Believe  
 me, Frankenstein : I was benevolent, my soul glowed with love and  
 humanity : but am I not alone, miserably alone ? ...’

これは ‘To——’ とも、*Alastor* とも部分的に共通する主題であって、  
 ‘To——’がこの点に踏み止まろうとするところを、*Frankenstein* と *Alastor*  
 とは夫々の方向に追求を進めているのである。ともかく、‘To——’は次のよ  
 うに続いて結ぶ<sup>12)</sup>。

This fiend, whose ghastly presence ever  
 Beside thee like thy shadow hangs,  
 Dream not to chase;—the mad endeavour  
 Would scourge thee to severer pangs,  
 Be as thou art. Thy settled fate,  
 Dark as it is, all change would aggravate. (31-6)

この最後の二、三行には、またしてもエウリピデスのエコーが聞き取れる  
 のではなからうか。

...Ἑηλοῦσ’ ἄταν διὰ παν-  
 τὸς δυσδαίμον’ ἐν γὰρ ἀνάγ-  
 καῖς οὐ κάμνεις σύντροφος ὤν.  
 μεταβάλλει δυσδαιμονία.  
 (*Iphigenia in Tauris*, 1117 sqq.)

(I envy those unhappy from their birth,  
 For to be bred and seasoned in misfortune  
 Is to be iron to it,  
 But there is something in the pang of change  
 More than the heart can bear,...)  
 (tr. Bynner)

## 3

先に触れた、シェリィの友人であった小説家 T. L. ピーコックに、*Alastor* なる題名の由来を聞こう。

I proposed that [title] which he [Shelley] adopted. The Greek word 'Ἀλάστωρ is an evil genius, *κακοδαίμων*; though the sense of the two words is somewhat different it is in the *Θανείς Ἀλάστωρ ἢ κακὸς δαίμων ποθέν* of Aeschylus. The poem treated the Spirit of Solitude as a spirit of evil. I mention the true meaning because many have supposed 'Alastor' to be the name of the hero of the poem.<sup>13)</sup>

ピーコックが引いている、アイスキュロスからの用例は、*Persae*, 334 であるが、*ἀλάστωρ* は特にギリシャ悲劇に頻出する語であり、先に取上げた 'To ——' にも、エウリピデスからの引用やエコーが見られることから察して、シェリィは当時もギリシャ悲劇に親しんでいたであろう。<sup>14)</sup>そしてかなりな Hellenist であった彼は、*ἀλάστωρ* の意味についても、ピーコックよりもよく知っていたかも知れない。Liddell & Scott によればその語義は次の如くである。

- I. avenging spirit or deity, with or without *δαίμων*.
- II. Pass., he who does deeds which merit vengeance, wretch.

後者の用例はアイスキュロスの *Eumenides*, 236 に見られる。δέχου δὲ πρηνεως ἀλάστορα (アラストールなる我を情け深くも受容れ給え) と祈るのは、ここでは復讐神に追われる身のオレステスである。従ってシェリィの意図したところでも、‘Alastor, or the Spirit of Solitude’ とはある意味で主人公自身を指し、文字通り ‘alone with himself’ なることを求めた詩人は、自己の影を追い求めているのではないか。これは ‘To——’ において詩人が、思い止まるべく自己をいさめたまさにその事なのである。しかし「求める」と呼ぶには余りに passive な詩人の心的状態は ‘passion’, ‘impulse’, あるいは ‘driven’, ‘obedient’ などと、頻繁に繰返される語によって強調されるように、それ自体は空虚なる器の如くである。(頻出する ‘vacant’ という語も key-words の一つである。) そして ἀλάστορα の語原がストアのクリュシッポス (Chrysippus) によっては、ἀλάομαι (wander, roam) に求められたことを考え合わせると、地理的な彷徨の意味でも、これは詩人を表わすにふさわしい言葉である。上の *Eumenides* からの例が、<sup>15)</sup> 復讐の女神たちに追われて国々を狂い巡るオレステスの言葉であることが、この意味でも思い合わされるのであり、現に Lattimore はこの一行を ‘Then take in of your grace the wanderer’ と訳出している。更に想起されるのは *Alastor* 677ff. にも言及されており、少年の日からシェリィの念頭を去ることなく、*The Wandering Jew* から *Hellas* に至るまで登場する「さまよえるユダヤ人」Ahasuerus である。<sup>16)</sup> この ‘vessel of deathless wrath’ (678) と詩人との対比は一そう鮮やかとなろう。

ところがピーコックの証言に対する判断はさまざまであって、<sup>17)</sup> Baker のように、その価値を否定し去る論者もあれば、Rogers のような研究家が暗黙にこれを受容れながらも、シェリィに関連しての彼自身のプラトンの理解から引出す次のような結論は、かなり正しいと思われる。

What is happening is that a struggle is taking place in the Poet's soul, a microcosm of the conflict in the universe between Good and Evil ;...<sup>18)</sup>

ただ、ロジャズはプラトンに傾きすぎているようであって、*δαίμων-κακο-δαίμων* の二元的対立を強調するけれども、問題は彼自身も認めるように、善悪いずれかにくみするよりも前に、いずれが善でいずれが悪かが見分ち難い点にある。今一つは、靈魂を小宇宙と見るのとはむしろ逆に、シェリィは宇宙を精神の投影として見ているのではないか、ということである。(この点については先に p.28 においても触れた。) これは、よく指摘されるように、シェリィの比喩が具体物を表象するに抽象的心像をもってするという、一般とは逆の傾向にも通じるものである。彼が *Alastor* 的主題を再び二年後に取上げた *Prince Athanase* (1817) が失敗作として、断片のままに終わった理由も、その一つは *Alastor* の本質的 ambiguity は未解決のままに、*Urania-Pandemos* の対立を表面に押出そうとして、取扱いが外面化されすぎた点にあるだろう。

さてベिकाァは上に触れたように、ピーコックの証言を、事実としては否定するわけではないが、作品の理解へのその価値を全く認めない。彼は *Alastor* 主題そのものを認めないのであって、その攻撃はシェリィの自序にまで及ぶ。<sup>19)</sup> 彼によると、先ず出来上った詩には *Alastor* 主題など存在しなかった。シェリィが表題に窮してピーコックの提案を容れたこと自体に無理があり、その際つじつまを合わせるために序文の一部を書き加えたのであって、序文そのものも矛盾を含む、というのである。そこで以下に暫らくベिकाァの序文の読み方を検討してみよう。彼が *Alastor* 主題の唯一の表明と見るのは次の一文である。

The poet's self-centred seclusion was avenged by the furies of

an irresistible passion pursuing him to speedy ruin.

ところが少しく後に次のような文が来る。

Among those who attempt to exist without human sympathy, the pure and tender-hearted perish through the intensity and passion of their search after its communities, when the vacancy of their spirit suddenly makes itself felt.

ベィカァはこの二文が両立しないと考える。なぜなら「自己中心的な」詩人と「清らかに心やさしい」詩人とは同一人物ではあり得ないから。しかしそれは前後矛盾しないように解釈できるし、当然すべきである。「人間的共感なしに生きようとする人々」とは詩人に対置された他者ではなく、詩人が試みた生き方の一つを示すものである。すなわち ‘Among those who attempt...’ とは ‘Amidst others who...’ ではなく、 ‘Of all those—including the poet himself—who attempt...’ と解すべきところである。事実この主人公は人間的共感を求めずして生きんと努め、自らの心の中なる空虚を悟ったときにすら、必ずしも人間的共感ならぬ理想愛を求めて——ここで、‘its communities’ の ‘its’ は ‘human sympathy’ を受けるのではなくて、‘their spirit’ を先取するのであろうか?——さまようのである。この文は詩人の人生態度の二つの段階を表わすものであり、人間的共感なくして安易に生きる者——‘attempt’ とは不用意に用いられた語ではない——と心やさしき詩人とを区分するものではない。更にこれにすぐ続く最後の部分：

All else, selfish, blind, and torpid, are those unforeseeing multitudes who constitute, together with their own, the lasting misery and loneliness of the world. Those who love not their fellow-beings live unfruitful lives, and prepare for their old age a miserable grave.

はかつて A.C. Bradley が、キーツの *The Fall of Hyperion* 中の有名な一節 (i, 147 ff.) に影響を与えたであろうと指摘した箇所であるが、これが詩人以外の「目先きの見えぬ大衆」を指すというならば、いかなる意味で詩人が「同胞を愛する」部類に属するのか。詩人はアウグスティヌスの「告白録」中の言葉をモットーに掲げて、‘Nondum amabam, et amare amabam, quaerebam quid amarem, amans amare’ と公言するのである。ブラッドリィもこの点に疑問を抱いた一人であって、‘...the world. Those...’ の部分は ‘...the world—those...’ と続けるべきだという Buxton Forman の推定が正しいのではないかと考えた。事実初版では fellow-beings の次にコンマがあったらしいのはこの説にやや有利であり、更に内容的にも形式的にも

selfish ..... love not their fellow-beings

torpid ..... live unfruitful lives

blind ..... prepare for their old age a miserable grave

のような齊合が認められることから ‘... those (multitudes) who love not...’ と読んで上の文に続けたい気がする。

キーツの Moneta が夢想家と詩人とを峻別して、

The poet and the dreamer are distinct,

Diverse, sheer opposite, antipodes. (*The Fall*, i, 199-200)

と言うのも、両者を相容れぬ別個の人種としているのではない。もしそうならば、キーツ自身救いようのない夢想家に属するであろう。そうではなく、夢想家と詩人とは成長の二段階であって、夢想家は夢想家たることを自覚することによって、初めて夢想家であることを超え、humanity に目覚めた詩人とはなる。その故にこそキーツは彼の断片を大胆にも *The Fall of Hyperion: A Dream* と銘打ったのである。努めてシェリィの博愛主義的な影

響を避けようとしたキーツではあるが、彼に対するシェリィの影響は思いの外大きい。両詩人が1817年に会して長詩の競作を約したとき、夫々に実ったのは *The Revolt of Islam* と *Endymion* とであったが、*Endymion* 創作に当っては *Alastor* がキーツの念頭にあったことは、よく指摘される所であり、キーツは女神 Cynthia とインド少女とが同一であることを示すことをもって、*Alastor* における幻の乙女とアラビアの少女との実在的関係についての問に対する、彼の答としたのである。ただ、これは二律背反的な懷疑主義の中に動いているシェリィにとっては受容れ得ない解決法であった。シェリィにとって、もう一つ開かれていた alternative は詩人と夢想家の価値段階の逆転である。これについて語るには E. A. ポウを引合いに出すのが好都合であろう。ともかくシェリィ、キーツともに *The Triumph of Life*, *The Fall of Hyperion* という、両者にとって最高の傑作となるべきであったダンテ的幻想の断片を絶筆としたことも偶然ではなく、意識の共通性の問題として、広くは Albert Béguin が考究した 'l'âme romantique et le rêve' の文脈において把握さるべきものであろう。

## 4

前二章において述べ来たったことを傍証するためにも、E. A. ポウについてもっと早く語るための場所を見出すべきであったかも知れない。ポウとシェリィとの関係は、*Tamerlaine* から *Al Aaraaf* に至るポウの初期詩篇に与えた後者の影響に止まるものではなくして、本質的な両詩人の affinity にある。両者は霊の世界に対する異常な——自殺的な——慄れとともに *macabre* なものへの偏執的関心——それは霊に対する肉体の *humiliation* の表われであろう——をも共有している。ポウはシェリィについて語る機会を多くは持たなかったが、*Marginalia* の一篇 'Shelley' においてうかがわれるように最も早くシェリィの特質を把握した人であった。ポウの眼に映じた

シェリィの世界は、我々に見えるよりもはるかに複雑で多彩なものであったろう。そのポウはシェリィの難解さを我々に注意している。

He [Shelley] is the most fatiguing of poets ... What in him, seems the diffuseness of one idea, is the conglomerate concision of many : and this species of concision it is which renders him obscure.

ポウがこのように看破していたそのシェリィが、ヴィクトリア朝には少女的な詩人になり下ったのはなぜであろうか。ポウはシェリィとテニスンの止揚の上に立つ、詩の理想を夢みていた。ポウの挙げる理想的な詩人の条件はマラルメの出現を期待させるものの如くに読まれる。そしてマラルメがテニスンに対して抱いた関心はよく知られた所であるが、シェリィは、そこに至る歴史の中では全き変容を遂げねばならなかったのであろうか。シェリィ=ポウの系譜は英文学においては遂にフランシス・トムソンをしか生まなかった。

さて、ポウの *Marginalia* には今一篇 'Lord Byron and Mary Chaworth' と題するものがあるが、そこにおいてポウはいわゆるロマン的愛の本質を衝いている。

...that it [Byron's attachment for Mary] *was* thus earnest and enduring, does not controvert, in any degree, the opinion that it was a passion ... of the most thoroughly romantic, shadowy and imaginative character. It was born of the hour, and of youthful necessity to love, while it was nurtured by the waters and the hills, and the flowers, and the stars. It had no peculiar regard to the person, or to the character, or to the reciprocating affection of Mary Chaworth. Any maiden, not immediately and positively repulsive, he would have loved, under the same circumstances.

これはその対象が、誰でもよいだけにかげがえがなく、その機会が、偶然であるだけに必然であるようなロマン的な愛への、自己反省的な洞察である。そして河や山、花や星の力に触れるところはシェリィの 'To ——', バイロンの、メアリィ・チャーワスの思い出を綴る *The Dream* を直ちに想起させる。

[He] made him friends of mountains : with the stars  
And the quick Spirit of the Universe  
He held his dialogues ; ...

(*The Dream*, 195 ff.)

詩人ウィルバハは、ポウのこのバイロン論にふれて次のように註している。

Poetic love... is a unilateral, visionary, creative act of the poet's, facilitated no doubt by but ultimately unrelated to the presumptive beloved. The real affair is between the poet and his soul, and the function of love is to produce visions.<sup>21)</sup>

この 'poetic love' という語句からは、ポウの自己批評的な 'romantic' という形容詞が抜け落ちているが、この文はバイロンの詩を説明する以上にポウ自身やシェリィの詩について語っている。詩人の「魂」とはポウにおいては Psyche であり Ligeia であり、実人生における従妹のヴァージニア・クレム (Virginia Clemm) である。またシェリィにおいては 'Soul out of my soul' (*Epipsychidion*) でこそあって、現実にはメアリィであり、エミリアであり、ジェインでありながら、かつまた、その誰でもない。バイロンに例証を求めるならばメアリィ・チャーワスよりはむしろ異母妹オーガスタ・リー (Augusta Leigh) であり、作品においては Manfred の妹にして恋人であった Astarte の霊ではなからうか。

Frequently these narratives [of the hero's journey to revisit his Psyche in Dream-Land] involves a 'division of the hero's personality into two or more characters', the fundamental duo corresponding to what Poe called the "Bi-Part Soul." I shall refer to these two egos as the Poet and the Dreamer : the Poet represents the hero's power to venture into and witness the dream, while the Dreamer represents the *moi intérieur*, the pure visionary self.<sup>22)</sup>

ここにおいて「詩人」と「夢象（幻視者）」との相対的地位は、キーツにおけるとは逆転するのであって、人類への愛を通しての世界の解放と、自己への沈潜を通じての霊の世界への離脱、復帰という二つの相反する道、一見両立させがたい目的、を前にして、二つの価値の体系の間に選択を迫られたシェリィは、ポウとともに後者を選ぶべき気質的傾向にもかかわらず、なお前者の価値を意識的努力の上では優先せずにはおけないのであった。<sup>23)</sup>

注：—

- ① 'Atheism leaves to man reason, philosophy, natural piety, laws, reputation, and everything that can serve to conduct him to virtue:...'
- ② *The Magic Plant*, p.143.
- ③ *Alastor* と同時に発表されたが、その原型はすでに 'The Esdaile Notebook' に見られる。但しこの詩は、特に1816年の version では、対話詩と見られるのではないが、という気がする。多少考察を必要とすると思われるので、以下に全文 (1816年の version) を引く。

[A.] The pale, the cold, and the moony smile

Which the meteor beam of a starless night  
Sheds on a lonely and sea-girt isle,  
Ere the dawning of morn's undoubted light,  
Is the flame of life so fickle and wan

That flits round our steps till their strength is gone.

[B.] O man! hold thee on in courage of soul

Through the stormy shades of thy worldly way,  
And the billows of cloud that around thee roll

Shall sleep in the light of a wondrous day,  
Where Hell and Heaven shall leave thee free  
To the universe of destiny.

[A.] This world is the nurse of all we know,

This world is the mother of all we feel,  
And the coming of death is a fearful blow  
To a brain unencompassed with nerves of steel;

When all that we know, or feel, or see,  
Shall pass like an unreal mystery.

[B.] The secret things of the graves are there,

Where all but this frame must surely be,  
Though the fine-wrought eye and wondrous ear

No longer will live to hear or to see  
All that is great and all that is strange  
In the boundless realm of unending change.

[A.] Who telleth a tale of unspeaking death?

Who lifteth the veil of what is to come?  
Who painteth the shadows that are beneath

The wide-winding caves of the peopled tomb?  
Or uniteth the hopes of what shall be  
With the fears and the love for that which we see?

‘The Esdaile Notebook’ を校訂した K. N. Cameron はこの詩のエピグラフ

とされた “There is no work, no device, nor knowledge, nor wisdom, in the grave, whither thou goest.” (Ecclesiastes, ix, 10)は、詩の説明であるよりはむしろ出発点であると考え、シェリィは伝道の書の唯物論的厭世主義に必ずしも同意していなかったとして、1811年6月に詩人がエリザベス・ヒッチナァに宛てた手紙を引用している：“I think I have a right to draw this inference, that neither will soul perish; that in a future existence it will lose all consciousness of having formerly lived elsewhere...” しかし、この詩を上仮定したように A と B との死に関する対話と見なすべきものなら、A (奇数の聯においてのみ we, our という語が現われるのに注意) が詩人であり、B は遂に不明であって、最後の聯においても、詩人は B が与える慰めを受容れるべきか否かを知らない。詩の構造の均斉の上からも要求されるBの答えは、遂に与えられないのである。このように見ると、この詩もまた懐疑主義に近づく。なお細かな点について言うと、第一聯の主語は勿論 ‘the flame’ である。また第二聯 ‘thy worldly way’ は ‘The Esdaile Notebook’ では ‘thy doubtful way’ とあり懐疑主義的観点にも、また第一聯の ‘undoubted way’ との対比のためにも一そう適切である。第四聯の ‘this frame’ が多少引掛かるならば、これは第三聯の ‘This world’ と同じく、此岸的な意味であると考えれば、‘thy frame’ とあるより一そう一般的であり、適切であろう。

④ 以下に引くのはその全文である。

Oh! there are spirits of the air,  
 And genii of the evening breeze,  
 And gentle ghosts, with eyes as fair  
 As star-beams among twilight trees:—  
 Such lovely ministers to meet  
 Oft hast thou turned from men thy lonely feet.  
 With mountain winds, and babbling springs,  
 And moonlight seas, that are the voice

Of these inexplicable things,  
    Thou didst hold commune, and rejoice  
When they did answer thee ; but they  
Cast, like a worthless boon, thy love away.  
  
And thou hast sought in starry eyes  
    Beams that were never meant for thine,  
Another's wealth:— tame sacrifice  
    To a fond faith! still dost thou pine?  
Still dost thou hope that greeting hands,  
Voice, looks, or lips, may answer thy demands?  
  
Ah? wherefore didst thou build thine hope  
    On the false earth's inconstancy?  
Did thine own mind afford no scope  
    Of love, or moving thoughts to thee?  
That natural scenes or human smiles  
Could steal the power to wind thee in their wiles?  
  
Yes, all the faithless smiles are fled  
    Whose falsehood left thee broken-hearted ;  
The glory of the moon is dead ;  
    Night's ghosts and dreams have now departed ;  
Thine own soul still is true to thee,  
But changed to a foul fiend through misery.  
  
This fiend, whose ghastly presence ever  
    Beside thee like thy shadow hangs,  
Dream not to chase;—the mad endeavour  
    Would scourge thee to severer pangs.

Be as thou art. Thy settled fate,  
Dark as it is, all change would aggravate.

- ⑤ 以下に挙げる対応が単なる偶然の一致ではなく、意味の照応であるのは、文脈の中で見られた時、明らかである。

ministers (5, *Al.* 330, 698); hold commune (10, *Al.* 486); boon, love (12, *Al.*, 4); starry eyes (13, *Al.* 490); fiend (30, 31, *Al. Passim*),

- ⑥ Cf. Oxford ed., p. 902.  
⑦ *The Mutiny Within*, pp. 150f.  
⑧ *The Romantic Conflict*, p.  
⑨ *Revaluations*, p. 221.  
⑩ *The Romantic Comedy*, p. 69.

- ⑪ 主人公ヴィクター・フランケンシュタイン自身、このことに気づいていることは、次の引用から明らかである。しかも彼が利己的な独善性を超え得ぬところに、その破滅の原因がある。

I considered the being whom I had cast among mankind, and endowed with the will and power to effect purposes of horror... nearly in the light of my own vampire, my own spirit let loose from the grave, and forced to destroy all that was dear to me. (Ch. VII)

And could not such words from her [Elizabeth] whom I fondly prized, before every other gift of fortune, suffice to chase away the fiend that lurked in my heart? (Ch. IX)

- ⑫ この詩がコッルリッジに宛てられたものであると考えさせることを阻むのは、特にこの最後の聯である。殆んど命令文からなるこの聯が20歳も年長の詩人への忠告とは考え難く、エウリピデスからの教訓はなおさらにこれがシェリィ自身の心に向けられたものとの感を深くさせる。

- ⑬ N. Rogers, *Shelley at Work*, p. 70.

- ⑭ 但し メアリィによるとシェリィが1814—16年にかけて読んでいたギリシャ語の

書目は、ホメロス、テオクリトス、トウキュディデス、ヘロドトス、ディオゲネス・ラエルティオス、プルタルコス、ルキアノスの多きにわたりながら、悲劇詩人からはアイスキュロスの *Prometheus Vincius* を挙げているにすぎない (Cf. Oxford ed., pp. 528 & 536)

- ⑮ ‘wretch’ (OE wrecca) が ‘wreak’ (OE wrecan) と語原を同じうし、‘wre-can’ (revenge, punish) の原義が ‘drive, urge’ であったこと、また ‘wre-can’ と ‘urg-ere’ が究極において同じ語原を有すること (√ WERG) も考え合わせると面白い。
- ⑯ A black demon, let loose from hell upon Ahasuerus, goads him now from country to country; he is denied the consolation which death affords, and precluded from the rest of the peaceful grave. (note to *Queen Mab*.)
- ⑰ *Shelley's Major Poetry*, pp. 44ff
- ⑱ *Op. cit.*, p. 70.
- ⑲ この序文が詩に対して持つ意味を否定する人は甚だ多い。極端な一例を引くと  
Neither the Preface nor the motto from St. Augustine (which was added in later editions) has much to do with the content and spirit of the poem. (Grierson & Smith; *A Critical History of English Poetry*, p. 355.)
- ⑳ ‘The Letters of Keats’ in *Oxford Lectures on Poetry*, pp. 240 ff.
- ㉑ R. Wilbur (ed.), *Poe's Complete Poems*, p. 18.
- ㉒ *Ibid.*, pp. 19f.
- ㉓ 本稿は未だ *Alastor* への予備的考察の域を脱しない。本文に則しての具体的論究は別の機会に俟ちたい。